

高校生のあなたへ

平田 徳男

はじめに

年輩の人に、「人生を振り返って、心身ともに変化の大きかった時期はいつか」とたずねたら、大方の人が「青春時代」と答えるのではないだろうか。さらに、「その青春時代の中で、最も変化が大きかった三年間を任意に選ぶとすればいつか」とたずねたら、「高校時代」と答える人がいけば多いのではないかと思います。

この時期は、人生八十年を生きるための、「心」と「体」と「友人」をつくり、自分の進む道を見出す時です。生きるための「根」をしっかりと育ててほしいという願いをこめて、私が読んだ本からの文章や高校生に話したことなどをあげながら、書いてみましょう。

三億分の一

私たちが、人間としてこの世に生を受けるのは、極めて稀な幸運（確率）だといわれています。ある女医さんが書いた本にある話です。

診察室に、入ってきた一人の女子高校生に、どうしたのかとたずねると、「中学時代からシンナーを吸っていたので、身体のこと心配でたまらない。番長格の上級生から、『自分たち

の身体はあちこちやられていてもう元に戻れない。あがいて逃げてでも駄目だ』と言われた」とのこと。

数日後に、種々の検査をした結果、何の異常も認められなかったことを話したら、ほっとしたらしく、「実はもう将来子供が産めないくらい駄目になっているのではないかと、心底氣に病んでいた」と正直に話した。

そこで、女医さんは彼女に、「莊嚴で神秘的な受胎ドラマ」の話をします。

《女性は、生まれた時卵子の元になる細胞を十万も持っている。それが思春期に到るまでに三万くらいに厳選され、実際に排卵に導かれる数は僅かに四百個程度である。排出された卵子の寿命は一日以内であるから、精子と出会える時間は極めて少ない。

一方、精子の方は、一回に三億が女性の体内に送り込まれるが、この中のたった一個だけが、卵子との出会いと結合を果す勝手者となる。

女性の体内に入った精子は三つの試練に出会う。まず入っていった体内は酸性を帯びているので、酸に弱い精子は一斉に、その奥のアルカリ性の子宮頸管へと必死で泳いでいく。弱いものや未熟なものがふるい落とされる。

ようやく子宮頸管にたどりついたものも、ここから、子宮腔内を通り抜けて卵管へと進んで行かなければならない。ところが繊毛のそよぎは、進行方向と反対の向きのため、精子は流れ

に逆らって泳いでいかなければならず、この第二の関門で多くはふるい落とされ、屈強のものだけ残る。

こうした困難に打ち勝って卵管にたどりついて、必ずしも卵子と出会えるわけではない。難関を越えながらやってきた精子が首尾よく卵子に出会えた後、第三の最後の競争が展開される。卵子に出会った精子は、一斉に卵子の表面に群がり、中に入ろうとするが、卵子は表面に顆粒膜という層をはりめぐらし、容易に精子の進入を許さない。そこで精子は、酵素を分泌して、なんとかこの顆粒膜を溶かして卵子の内部に入りこもうとアタックし始める。その時、おびたしい精子に囲まれた卵子は、ルーレットのように回転をし始める。回転する一個の精子とそこに群がるおびたしい数の精子。そしてついにある一点で顆粒膜が溶け、一番そばの精子がただ一個、そこから卵子の中に入る。とその瞬間に、卵子の表面は受精膜という新しい膜に変わり、他の一切の精子の侵入をはばむ。』

受精までの道のりをこのように説明した後で、著者はこう言っています。

『このような試練の果てに、三億の中からただ一個の精子が選ばれる。』

これはより強い個体を子孫に残そうという種の保存の法則に導かれたのである。その精子の頭部に載っている遺伝子により、生まれ来る子ども性の性別は決定され、さまざまな遺伝特性が子に受け渡される。ほんのわずかなちがいで隣の精子が卵子に侵入していれば、子どもは全く別の特性を遺伝することになる。それを思うと一個の卵子と一個の精子の出会いの恐ろしいま

での荘厳さに心打たれる。』

人間はみな、出発点からして、稀な確率と幸運によって選り抜かれた選手なのですね。

私はとるに足りない存在ではない

また、スイスのある学者は、精子の数を一億、女性が持つて生まれた卵子の数を百万、両親が出会った確率を十億分の一として計算し、自分がこの世に生まれた確率を「一〇〇兆×一〇億分の一」であるとした後で、こう言っています。

『私はかぎりなくたったひとつ。これからも唯一無二の存在でありつづける。誰も私と同じ遺伝組成を持ったことがなく、これからもけつて持つことはない。(中略)』

だから、私はとるに足りない存在ではないということだ。私はじゅうぶん自分のことに心を配っているだろうか。私は今まで自分の姿をきちんと認めてきただろうか。私は自分という人間に、それ相応の敬意を払っているだろうか。これらの問いに答えるために、せめてここではんのいつときだけ、目を閉じて静かに考えてみよう。』

高らかな人生肯定

宮崎のある歌人が、講演の中で、一人の障害者のこんな歌を紹介されたそうです。

『もう一度生まれ変わってくるときも塩谷トモ子の子に生まれない』

塩谷トモ子というお母さんの子どもとして生まれてきた障害者。だけど、もう一度生まれ変わってくるときも、この母親の子どもとして生まれたい、ということでしょう。

この歌を歌人は、「高らかな人生肯定」の歌であると言われた。

どういう生まれ方であるにせよ、どんな状態にあるにせよ、今の自分というものを肯定していく。自分を信じて、自分の可能性をかけて、自分が今ここにあることを素直に考えていこう。そんな高らかな人生肯定がこの歌にはあるということです。

人間には生まれる時、自分で選べないものが四つあるそうです。「親」・「性別（男女）」・「生まれる時」・「生まれる所」の四つです。

「どうしてこんな親から生まれたのだろう」と嘆くのではなく、この歌のように、「生まれ変わってもこの親の子として生まれない」という肯定から出発できることはすばらしいことです。

これで君の気分は楽になるだろう

《小学校を中退した。

田舎の雑貨屋を営んだ。破産した。

借金を返すのに十五年かった。

妻をめぐった。不幸な結婚だった。

上院に立候補。二回落選。下院も落選。

歴史に残る演説をぶった。

が、聴衆は無関心。新聞で毎日たたかれ、国の半分からは嫌われた。

が、こんな有様にもかかわらず、

想像してほしい、世界到るところの、どんなに多くの人が、

この不器用な、不細工な、

むつつり男に啓発されたかを。

その男の名は……もうお分かりであろう。

その男は、自分の名を、いとも簡単にサインしていた。

エイブ・リンカーンと。》

エイブ・リンカーンとは、もちろんアメリカの第十六代大統領エイブラハム・リンカーンのことです。貧しい丸太小屋に生まれ、一年足らずの小学校だけの学歴ですが、苦勞の末に大統領まで上りつめ歴史に残る数々の業績をあげました。彼の「人民の、人民による、人民のための政治」という金言とともに。

人は誰でも、「あんなになりたい」というあこがれや、「こうありたい」という理想を持っています。そして、その達成のために、「もっとがんばらなければ」とか、「もっと強くならなければ」と自らを励まし、律しながら、努力しています。

その際、適度の緊張は向上のいい刺激剤になりますが、それが強すぎると、「焦^{あせ}り」と「不安」の虜^{とりこ}になって、自分自身を見失うことがあります。

そんな時、力を与えてくれるのがこのリンカーンのことばです。

平均が一になるために

先日の養護学校訪問の感想文を読ませてもらいました。

まず何よりも、君たちが担任の先生と一緒に、養護学校に出かけてくれたことを嬉しく思います。自分の体をそこまで運んで、自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の手で触れ、全身全霊をもって障害のある子どもを感じ取ったことの意味はたえようもなく大きく尊いものです。

そのことがよく表れた感想文でした。

私も以前、あの学校を訪ね、子どもたちの心身の二重三重の障害の大きさと複雑さに大変な衝撃を受けました。それからずっと、こんなことを考え、話してもいます。

《健康を恵まれたものは、それを喜ぶだけではすまされない。人間の生活能力（人間としての尊厳ではない）の平均が一であるとすれば、平均の一より大きい能力を持つ者は、それより小さい者のために、何らかの形で貢献・奉仕しなければならない。その方法はさまざまです。

例えば、目の不自由な人の手を引いて横断歩道を渡ることも、足のよく動かない子どもを背

負ってやることも、一つの奉仕です。そして、それは直接的なものです。

しかし、そういう直接的なことがいつでも、どこでも、誰にでもできるわけではない。だとすれば、われわれは、自分に与えられた能力を可能な限り伸ばし、自分の職責を十分に果たすことによって、間接的にでも障害者の役に立てるのではないだろうか。

電気・電子に興味と関心のある者は、その道を研究して障害者のための新しく使いやすい用器具を作り出す。法律を学ぶ人は、障害者が生活しやすい環境・条件を整備する制度を整える。医者や看護師などをめざす人は、いうまでもない。音楽や絵の得意な者は、音楽や絵を通じて、心やさしい者はそのやさしさを豊かな情操を伝える。

どんな立場にあっても自分のなすべきことを誠意をもって果たしていけば、それはめぐりめぐって、障害者のところへも廻っていくのではないだろうか。》

「多く受けた人は、多く返す」という言葉もあります。健康でさまざまな能力に恵まれている君たち。どうか、「いつの日か、何らかの形であの子どもたちのお役に立ちたい」という気持ちを忘れないでください。

養護学校の校長先生が、最後に、「この子どもたちの分まで勉強してください」と言われたのは、そんな意味ではなかったでしょうか。

カウントダウン

二十一世紀、二〇〇一年をめざして、様々な人がこんなことをしたい、こういうことに挑戦したいと考えています。その一人として、元日（一九九八年）付けの「朝日新聞」は、日本画家の平山郁夫さんを紹介していました。

《「今世紀最後の日」の完成を目指し、奈良薬師寺の壁画「大唐西域記」を描き続けて十五年。平山さんのライフワークはいま、七割まで進んだ。作品は高さ三メートル余り、全長は五十メートルに近い。高僧、玄奘三蔵がインドから中国へ経典をもたらし十七年の旅を描く。「あと三年、いよいよ終盤、カウントダウン」。構想を練り始めたのは約三十年前。旧陸軍が中国から持ち帰った三蔵法師の遺骨を薬師寺に分骨する話があり、骨を納める建物内部の壁画を自ら志願した。

「玄奘は、二十九歳の時の『仏教伝来』以来、追いかけてきたテーマ。私の集大成として、今世紀いっぱいかけて仕上げ、玄奘にささげようと決めたのです」。以来、玄奘の辿った道のりを追体験する旅が始まった。零下二十度のパミール高原で高山病に苦しんだことも。玄奘の苦勞や使命感に思いをはせながら、見てきたものは「結局、自分自身だった」と言う。

多忙な中、最近では自宅の画室で日に七、十時間、筆をとる。広島で被爆した後遺症はいまものこり、つねに「完成できずに倒れる不安」と向き合う日々だ。「毎朝、仕事の進み具合を、原爆で死んだ人達に報告しながらやっています」。たばこも酒も断った。二〇〇〇年には七十

歳。この年の十二月三十一日に完成させるつもりだ。自身の仕事と、玄奘が旅をし、経典の翻訳に費やした時間の長さも、年齢も、ほぼ重なる。「今世紀最後の日の夜十一時五十九分五十九秒に最後の筆を入れ、新世紀を告げる鐘と同時に公開できればと思います」。

「完成できずに倒れる不安と向き合う日々」とは実に重いことばですね。

参考図書

服部洋子著『親と子ーアメリカ・ソ連・日本ー』（新潮選書）

アンドレ・ジオルダン著 遠藤ゆかり訳『私のからだは世界一すばらしい』（東京書籍）